

尾道大学中世文藝研究会の旗揚げと寛元元年『河合社歌合』の注釈

平成二十二年十月一日に尾道大学中世文藝研究会を旗揚げした。その記念として、寛元元年『河合社歌合』の注釈並びに同作品に関する研究論文を纏めたものを、「尾道大学日本文学論叢」別冊として刊行するものである。

注釈は、会の立ち上げ以前より有志によつて少しずつ輪読したものを基礎としている。題目に「試注」と付した如く、理解の行き届いていない箇所や読み誤り、不備も多々あるうかと思われる。それでも今回「試注」として敢えて公刊するのは、藤原定家没後、その息為家が初めて判者をつとめたと目される和歌史上注目すべき歌合でありながら、従来等閑視されてきた感のある『河合社歌合』の注釈として、今後この作品を研究する上での叩き台になればと願つてのことである。大方のご批正を謹んでお願い申し上げます。

歌合は、歌人がそれぞれ和歌を持ち寄つて、判者がその良し悪しを判定する。衆議といつて歌合の参加者が上下の隔たりなく歌を批評し合うこともあり、そういった意味では研究会と一脈通じるものがある。研究会の〈旗揚げ興行〉として歌合の注釈成果の刊行は相応しいように思う。

なお、会の名前は、私の恩師位藤邦生先生が、さらに位藤先生の恩師故金子金治郎先生より引き継がれ、嘗て主宰されていた広島大学中世文藝研究会に由来する。活況を呈していた、かの研究会に雰囲気だけでもいつか近付ければと切に願つている。

末筆ながら、別冊の刊行をご快諾いただいた寺杣雅人尾道大学日本文学会会長並びに学会員諸氏、そしてお忙しい中ご寄稿いただいた位藤邦生先生に心より深謝申し上げます。

平成二十二年十月良辰

尾道大学中世文藝研究会 発起人

藤 川 功 和